



Vol.17
March 2013

A r t & C u l t u r e



文化政策研究科長

片山 泰輔

Taisuke Katayama

芸術団体・文化施設をとりまく 環境変化とアートマネジメント

我が国の芸術団体や文化施設は大きな改革の波にさらされている。2003年には地方自治法の一部改正により、公の施設の指定管理者制度が導入され、公立文化施設の管理運営に民間企業やNPO法人等の参入が可能になった。民間の創意工夫と柔軟な組織体制のもとで、質の高いサービスを効率的に提供することを目指したものである。ところが、地方自治法には「公の施設の設置の目的を効果的に達成するため必要があると認めるとき」に導入するものと規定されているにもかかわらず、実際には目的を蔑ろにして、経費削減のためにこの制度を誤用する自治体もみられる。

こうした中、2012年6月には、劇場・音楽堂等の活性化に関する法律（通称：劇場法）が制定・施行された。博物館や図書館とは異なり、これまで法的基盤をもたなかった劇場や音楽ホールが、単なる施設ではなく専門的な職員を擁した機関として定義され、国際交流から地域社会における社会的包摂まで含めた様々な公益的な使命をもった存在として位置づけられた。また、国際的に創造都市が注目されるなか、文化や芸術を単なる余暇・娯楽として捉えるのではなく、産業をはじめとする様々な領域で人間の創造性を発揮させ、都市の発展をはかるための重要な投資として捉える考え方も徐々に普及しつつある。

一方、民間については、2008年12月から施行された公益法人制度改革によって、これまでの主務官庁制が廃止され、財団法人や社団法人を届出によって設立できるようになった。また、2012年4月の改正特定非営利活動促進法の施行により、租税優遇措置が受けられる認定NPOの条件が大幅に緩和された。これらは公益を担う民間非営利団体の充実をはかり、官から民への流れを加速させようとするものである。

これらを支える国や地方自治体による助成制度についても、現在、様々な改革が行われている。国においては、日本版アーツカウンシルの掛け声のもとに、プログラムオフィサー（PO）等の専門職を配置し、助成金交付事業の質的向上をはかろうとしている。また、批判の多かった赤字補填型事業補助の仕組みも徐々に改められつつある。従来の制度では、公演等の具体的

CONTENTS

巻頭寄稿	1
活動紹介	2~7
SUAC PHOTO ALBUM & インフォメーション	8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533

●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

事業にかかる直接経費のみが助成対象となり、しかも「自己負担の範囲」という条件が課されるため、努力して収入を増やすと、その分助成額が減る仕組みになっていた。助成される側からみると、経営努力のインセンティブが削がれることにくわえ、内部留保を次の活動に向けた投資に向けられないという問題があった。

公立文化施設にしても民間非営利の芸術団体にしても、公共的な使命の達成は、単発の事業を成功させるだけでは実現しない。継続的な活動が不可欠であり、それを担うための組織の運営がアートマネジメントである。アートマネジメントについては、単に公演や展覧会等のイベント実施のことだと捉えてしまったり、営利のエンタテインメントビジネスと混同されるなど、まだまだ誤解も多い。しかし、本来は、公共的な使命を達成するための芸術組織の運営を指す。使命達成のためには必ずしも採算のとれない事業も必要であるため、事業収入と支出の間には赤字（インカムギャップ）の発生が不可避となる。したがって、自らの公共的な意義を訴えることによって、ファンドレイジングを行って収支を均衡させ、組織としての維持・発展を図るのである。これを国や自治体側からみれば、助成制度をはじめとした文化政策ということになる。アートマネジメントと文化政策はコインの裏と表の関係なのである。

公益を達成しようとする芸術団体や文化施設、あるいはこれらを助成することによって政策目的を達成しようとする国や自治体のいずれにとっても、芸術団体や文化施設の経営状態をマクロ的に把握することは不可欠である。ところが、我が国においては、芸術団体や文化施設の経営状況を包括的に把握できる統計は存在しない。3年ごとに行われる文部科学省の『社会教育調査』は、博物館、図書館、公民館から文化会館まで多分野を網羅している最も規模の大きな統計ではあるが、財務データは把握されていない。製造業、商業、金融業等、ほとんどの産業に関しては詳細な統計が作成されており、財務や労働力、生産物に関するマクロ的状況の経年変化を知ることができる。これにより、個々の企業は業界全体の中での自らの位置づけを知ることができるし、政策当局も、振興政策の効果がどう現れているのかをマクロ的に把握することができる。今後、文化の領域において、助成制度が赤字補填型の事業補助ではなく、内部留保を認める団体補助型になっていくとすれば、助成を受けた団体と受けていない団体で、その後の経営状況にどのような変化が生じたのかを把握することは不可欠となる。

静岡文化芸術大学は日本で初めての、そして唯一の文化政策学部を持つ大学である。アートマネジメントを中期計画における重点研究領域の1つに掲げ、現在は、文化・芸術研究センター長特別研究費のプロジェクトとして、全国の芸術団体・文化施設に対する包括的な経営実態調査を実施すべく準備を進めている。基礎データの継続的な蓄積を行うことで、アートマネジメント及びそれを支える文化政策の研究拠点となるとともに、我が国の芸術団体や文化施設の発展に寄与することになる。

静岡文化芸術大学の室内楽演奏会2012

「バンバン!ケンバン♪はままつ キーボードと出会うコンサートとフォーラム」(略称「バンケン♪」)

小岩信治 (文化政策学部芸術文化学科)

荒木菜摘 (文化政策学部芸術文化学科3年)

■概要

2012年10月20日(土)、21日(日)の2日間、「バンケン♪」は晴天のもと開催することができました。

静岡文化芸術大学内7会場で36のコンサート(含ワークショップ2)、9の講演・シンポジウムを、学外では、浜松市楽器博物館で20のコンサート、アクトプラザ2階・ホテルオークラロビーで12のコンサート、浜松市民映画館シネマイエラで鍵盤楽器演奏付き無声映画上映(1公演)、かじまちヤマハホールで2つのコンサートを開催しました。2日間の計80プログラムに延べ約4000人、実人数として1500人が来場されました。

演奏会、講演・シンポジウムとも基本的に45分単位のプログラムとして、気軽にいくつものプログラムを楽しんでいただけるようにしました。

コンサートは1公演一般800円、学生・高校生500円、中学生以下無料で、講演・シンポジウムは全入場者無料としました。運営資金は、大学イベント経費、助成金、入場料収入でまかなっています。浜松市文化振興財団、ローランド芸術文化振興財団、そして日本音楽学会の助成に対して御礼申し上げます。



桑山哲也公演 すばらしい演奏に加えて絶妙のトークが聴衆を魅了した

■公演の内容

この事業では、ピアノのまち・浜松を世界にアピールする「キーボード」に焦点を当てました。コンサートで使用された楽器は、チェンバロ、クラヴィコード、オンド・マルトノ、フォルテピアノ(歴史的ピアノ)、ピアノ、鍵盤ハーモニカ、鍵盤リコーダー、アコーディオン、電子オルガン、シンセサイザー、電子ピアノ、足踏み式リードオルガン、電子チェンバロ、小編

成ガムラン、ジェゴグ、中米のマリンバ、親指ピアノ、タイの木琴ラナートなど多岐にわたります。一般的な演奏会と異なる点は、コンサートの演奏者と聴衆の距離が近く、演奏者による楽器の解説が聞けるという点です。一部は演奏のみのステージもありましたが、多くの方にとってこれまで知らなかった鍵盤楽器やピアノ音楽と出会う場となったと思います。浜松市に本社を置く楽器メーカーである、ピアノメーカーとして知られるヤマハ、河合楽器製作所だけでなく、ローランド、鈴木楽器製作所が参画しました。



講演2「メロディオンとアンデス」 鈴木楽器製作所関係者とともにも栗コーダーカルテットが登壇した。

コンサートに加え、講演・シンポジウムを開催することにより、大学(文化政策学部)の研究対象としての楽器産業、音楽文化について考える契機となりました。当初の計画では梯郁太郎氏、鈴木萬司両氏が登壇予定で、今回はご体調を考慮して残念ながら叶いませんでしたが、浜松の楽器産業文化史を作った「ひと」にも焦点を当てるプログラムを目指し、元ヤマハの日吉昭夫氏をお招きできました。講演・シンポジウムのタイトルは次の通りです。講演1「電子楽器：ヤマハはエレクトーンから」、講演2「メロディオンとアンデス」、講演3「ピアノの発達と浜松」、講演4「浜松のピアノ産業調査中間報告」、(講演5は中止、)講演6「シンセサイザー開発史」、シンポジウム1「大正琴の文化史」、シンポジウム2「鍵盤楽器の開発と芸術表現」、シンポジウム3「オルガンの文化史」、シンポジウム4「キーボードのこれから」。

特別協力の4社それぞれが持っている技術、開発の歴史を紹介していただいたプログラムは、他都市ではできないものだったと思います。このような形で4社が一つの事業に協力したの

は初の試みであり、鍵盤楽器の多様さを再認識できる興味深いものでした。

一方で、鍵盤ハーモニカを手にした子どもたちが来場できるよう工夫しました。浜松に住む子どもたちにとって、鍵盤楽器は音楽の時間につかう教材というだけでなく、地域学習の重要な題材です。最も身近な鍵盤ハーモニカは、プロが芸術表現に使う楽器として理解できるように参加型演奏会（ワークショップ）を行いました。子どもたちが楽しただけでなく、一緒に来場したご家族の大人たちにも鍵盤ハーモニカの面白さや奥深さを感じていただけました。

当日は、企画・準備段階からのスタッフ49名（両学部の学生および大学院生、社会人聴講生）に加えて、1日目31名、2日目54名、計85名の当日スタッフ（浜松市立高生、浜松ジュニアオーケストラ団員など）が参加し、全体で総勢約140名が当日の運営に携わったこととなります。

浜松は、創造的な活動の拠点として、世界的に例を見ない「（鍵盤）楽器のまち」です。そして、本学を拠点として「楽器産業文化学」と名付けることのできる新しい研究領域が開拓できる可能性があります。

■他事業との連携

さて今回の事業にあたって、地域の音楽文化に貢献するためには、浜松での多様な大型事業をまちの魅力としてアピールする必要についても考えました。同じ秋の時期に開催された「やらまいかミュージックフェスティバル」「ハママツ・ジャズウィーク」「浜松国際ピアノコンクール」と連携し、共同広告事業（「はままつ 音楽の秋 6weeks」）を立ち上げました。具体的には、小学生へのチラシ配布、駅前広告塔の設置、首都圏メディアキャラバン、街中の飲食店チラシでの広報などを行いました。

■評価

今回の事業は、主旨、規模、スタイルなどについて学外から高く評価していただいています。浜松市役所では、市長や文化政策課などから、楽器の中でも鍵盤楽器に注目したこと、楽器メーカーの4社と連携したことに対して評価していただきました。浜松商工会議所からは企画の内容に加えて、街中の活性化へ貢献したこと、飲食店と連携した広報に対しても好意的なコメントを頂いています。浜松市教育委員会・小学校の先生方からは、子どもたちが地域学習の一環として参画でき、音楽鑑賞としても十分に楽しめたという点が注目されています。

講演・シンポジウム部分については日本音楽学会支部横断企画として助成を受け、学会会員の傍聴記が公開されています。

まず驚きは「ケンバン」というテーマで、これほど広範なジャンルを網羅し、しかもあらゆるジャンルの演奏、講演等に第一人者を招聘したことである。[……] 講演の大部

分は、楽器産業の現場で、自らが開発・振興等に携わってこられた、まさに前線に立つ人たちの経験談である。同じ社内でも入社時期がずれたり、分野が異なると、知らないことは多い。この機会に先輩の話を聞いて、改めて学ぶ所が多かったというコメントがあった。またライヴアル会社の人を前にしての講演は、日本では珍しい。このような企画あってこそ出来た、良い意味での競争と刺激を感じる。普段はほとんど聞くことのできない講演内容ばかりであった。[……] 日本の誇る「楽器の街浜松」のイベントを通して、私達が音楽観を広げ、柔軟な活動を目指すことができるよう、定期的な開催を願ってやまない。（荒川恒子 日本音楽学会東日本支部）

静岡文化芸術大学で文化政策を学ぶ学生のみなさんにとっては、まさに生きた 学習の場となり、この経験が将来の糧として生かされることは間違いない。（小西潤子 日本音楽学会西日本支部）

■「バンケン♪2012」その後

「バンケン♪」の問題意識や、この事業を通じて築かれたネットワークは、すでに次の展開を生み出しています。

まず2013年3月10日には、栗コーダーカルテットと演奏会を実施します。「バンケン♪」へのご出演がきっかけで、本学学生と連携しての演奏会にお声がけいただきました。「栗コーダー」の皆様が、本学学生とともに浜松を音楽活動の拠点の一つにしたいと感じてくださったことを嬉しく思います。会場は鴨江別館。「たっぷり音楽つめあわせ」というタイトルのもと、この企画がいろいろな音楽を浜松に呼び込む契機になればと思います。

鍵盤楽器の産業史研究というテーマに関しては、期せずして本年度、大橋ピアノ社の資料が浜松市博物館に収蔵されました。ディアパソンなどの商品名で知られる名工大橋幡岩（1896-1980）が残した工具や設計図面などは、ピアノ産業文化史の第一級資料と言えるでしょう。新年度には「バンケン♪」に参画した本学教員による特別研究が計画されています。「バンケン♪2012」の「講演4」に関心を持たれた方などに、引き続き注目をお願いしたいと思います。

「バンケン♪」の次年度以降については、まず2013年秋に、小規模な「バンケン♪2013」を計画中です。土曜日の午後、半日で4プログラム程度の催しを行い、「バンケン♪2012」の成果を整理しつつ、今後の課題について考える機会としたいところです。再びやや大きな催しができるとすれば2014年度で、現在浜松市文化振興財団、楽器メーカーと実行委員会設立について協議しています。鍵盤楽器をテーマに、クリエイティブなまち浜松の豊かな文化史に目を向け、このまちに関わる方々のシビック・プライドの醸成に貢献できる催しが持続的に行われることを目指していきます。引き続き、皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

風の記憶 山本一樹展

2012年4月14日（土）～5月20日（日）、浜松市美術館にて、また、同年10月1日（月）～10月26日（金）、天王洲アイル・セントラルタワーアートホール（東京都品川区東品川）にて、「風の記憶 山本一樹展」を開催しました。

「風」をキーワードとして、自らの心象風景をテーマにした金属彫刻を制作しています。金属彫刻と一言に言っても、扱う金属は多種あり、技法も多々ありますが、僕の専門・研究分野は「鍛金（たんきん）」という分野です。一般的に知られている「彫金」や「鑄金」と異なり、「鍛金」という言葉を知っている人は少ないと思います。僕自身、浪人して初めて知った言葉でした。

「鍛金」を一言で説明すれば、「あて金を使って、金鋸で金属板を成型する技法」です。東京藝術大学には、美術学部工芸科の中に「鍛金科」という科があり、僕はそこで学びました。おそらく、日本で「鍛金科」がある大学は他には無いと思います。

しかしその歴史は古く、1887（明治20）年、岡倉天心が設立した東京美術学校に「金工」として設置されたことに遡ります。ちなみに、東京美術学校は設立当初、「金工」「日本画」と「木彫」の計3科で始まりました。その後1895（明治28）年に「鍛金科」が設置。それから今日まで120年近くになります。伝統のある技法なのです。

「鑄金」も金属を扱いますが、「鍛金」が金属の「板」を素材として加工成型していくのに対して、「鑄金」は粘土や蠟で原型を作り、そこへ溶かした金属を流し込んで形を成型します。粘土の持つ形の緊張感と金属自体の形の緊張感はおのずと違います。鑄金では粘土で突き詰めた形がそのまま金属になるわけです。僕は「鍛金」で表現できる金属そのままの緊張感のある形の方が身に合っていたので鍛金を選んだわけです。



山本一樹（デザイン学部生産造形学科）

新しい作品に取り掛かる時に心掛けていることがあります。それは、何か一つでも「新しい試み」を盛り込むことです。新しいモチーフ、技法、やったことが無い仕上げ方法など。浜松市美術館の個展に際して、「真鍮」で作品を制作することに挑戦してみました。今までも部分的には真鍮で作った経験はあるのですが、全てを真鍮で作成するのは初めてです。僕の知っている限り、他の作家の作品でも見たことはありません。



ところが、これが問題でした。真鍮という素材は銅と亜鉛の合金なので、鉄やステンレスと比べれば加工がしやすく、3次曲面にするのも楽なわけです。ところが、そうやって作ったパーツを組み立てていく「溶接」が大変でした。どの金属も熱すると熱膨張します。しかし真鍮のそれは鉄の比ではありませんでした。溶接しようとして過熱した途端に、隙間無くすり合わせてあったものが目の前で暴れて火鉢の上のスルメのように10mmほどの隙間が空くのです。その力は、誰かに乗って貰っていてもダメなぐらいでした。また、もしその状態で強引に溶接したとしても、過熱を止めた途端に元の形に戻ろうとするので、結果として大きく歪んでしまいます。考えられることは全て試してみました。うまくいかず、結局、プロにお願いすることになりました。こんなことは30年以上金属を扱ってきた初めてです。知人に紹介された溶接工場へ行ってみると、金属が山のように積まれています。聞くと「福島原発の急ぎ仕事」との事。真鍮溶接は難解であることを知っているだけに、簡単には引き受けてもらえませんでした。何とか頼み、一週間後、受け取った作品はさすがに見事に溶接されていました。気になっていた「急ぎ仕事」の方は、「今朝7時に取りに来て、屋にはまた5トントラックが次の仕事を積んで来る」のだそうです。個人的なアートの現況と今の日本の社会問題がニアミスをした瞬間でした。

古の時代から、鍋釜から日本刀や鎧兜まで、多くの美術工芸品を作ってきた伝統技法である「鍛金」ですが、僕の作品を見ていただくと、金属の板から成形していったという事を感じさせる造形を見ていただけたと思います。これは、鑄金技法でも、彫刻的なアプローチでも無く、鍛金技法で作ったものだという事をアピールしたいという、僕の小さなメッセージでもあります。今回の個展に足を運んでいただいた方々に心からお礼を申し上げますと共に、ぜひ多くの方々に作品を見ていただき、鍛金技法についても知っていただきたいと願っています。

活動紹介

イブニングレクチャー2011-2012

中山定雄 (デザイン学部空間造形学科)

私がイブニングレクチャーを企画して、早いもので小さな会を含めると6回開催することができました。毎回市民の皆さんにも大勢来ていただいて、常連の方や、遠方から駆けつけられる方など、学生より熱心な方も少なくありません。他大学を含めた学生達も開始時間前に行列をつくるほど毎回盛況です。約15年前に留学をしていた学校で行われていたイブニングレクチャーがたいへん印象深く、あの感動を学生や市民に味わってもらいたいというのがイベントの出発点でしたので、ある程度の成功を収めていると感じています。今回のレポートは一昨年の夏に開催され、以前レポートをさせていただいたインテリアデザイナーの橋本夕紀夫さんの次の会から紹介させていただきます。

<佐藤可士和さん クリエイティブディレクター

2011年10月17日>

私にとっては大学の先輩であり、デザイン業界的には一番のタレントであることから、このイベントを始めた当初、いつかゲストに来ていただきたいと夢のように考えていた事がたいへん早く実現してしまいました。佐藤さんの仕事は、デザインはもちろんのこと、マーケティングや文化政策にも通じるために、毎回デザイン学部が主体の来場者ですが、文化政策学部の学生も大勢訪れました。市民も全国から来ていただき、大学の存在感を十分にアピールすることができました。会場はいつもの大講義室では立ち見を計画しても収まらず、もう一つの大講義室にもビデオ中継して行われました。今までの最大動員記録の約450人は今後超えることが困難であると思います。

レクチャーはプロジェクトの紹介を中心にその時々クリエイティブシンキングを解説していただきました。佐藤さんは元々グラフィックデザインを大学で学びましたが、電通時代に様々な商業プロジェクトを経験されたので、ものづくりにおいていかに大衆心理を操り、マーケティング価値を高め、トレンドをつくるかという観点が、都会的を超越して世界を股に掛けて発想しており、浜松の学生にはグローバルすぎて衝撃であったと思います。この学生の受けた衝撃が私の期待したイベントの目的です。学生諸君や地元のデザイナーに世界の一流を肉声で、顔を見ながら感じて欲しいのです。

レクチャーの終盤に参加者からの質問コーナーがありますが、その中でたいへん興味深い質問をした学生がいました。彼は毎日学校の課題に励み、創作活動やものの出来栄の善し悪しに一喜一憂していると言いました。さらに自分は作品を手で作り上げ、納得のいく作品が完成した時の達成感を追求しているので、マーケティングやプロデュースという感覚が理解できないとも言いました。会場は一瞬、凍りつきましたが、佐藤さんも学生時代は学校の課題などの創作活動にSUACの学生以上、取り組んでいたと皆が知っています。デザインである以上、視野を広く、自己満足で終わらないで、自分の作品をいかに人々

に伝えるかをこれから考えたら良いと答えられました。それは学生へのあたたかいエールであったと感じました。

<隈研吾さん 建築家 2012年1月16日>

空間造形学科の教員として隈さんのレクチャーを聞くことができるのは、たいへん恵まれたことであるばかりか、このイベントを通して親交を深められ、これからもこの分野で様々な教授をいただけるきっかけ作りとして、この上なく感慨深い会でした。私と隈さんの出会いは17年前の留学時代にロンドンのRIBA主催で日本の40代建築家展が開催され、その会場設営を手伝った時でした。私は、隈さんに1時間ほどマシニングのように話しかけて響きを買いました。他にも有名な建築家数名とその時知り合えたのですが、知り合ったと思っているのは私だけで、だれも私のことなど覚えていないのでした。そんなことはどうでもよくて、当時の私を思い出せば建築の情報に敏感で、特に日本の建築事情はあまり入ってこない環境で欲求不満状態、下手な英語での議論の嫌気など、複数の要因によってギラギラしていました。隈さんらと徐々に日本語で建築談義ができたことで将来の夢などが膨らんだものでした。最近の学生はそんな気持ちにはなってもらえるだろうかと問いかけるつもりで隈さんにレクチャーの依頼をしました。

会場を埋め尽くしたのはほとんど空間造形学科の学生でしたが、会場の学生から感じたのはなんとあの時のギラギラ感でした。情報社会、しかも同じ日本なのに、浜松の空間造形学科の学生は欲求不満だったのです。建築はスケールが大きく、複製が困難であるため自ら出向かなければマスターピースを味わうことができません。学生のバジェットで、しかも最近の消極的な青年の傾向では、結局留学中の私と同じぐらいの情報感覚なのでしょう。

隈さんは東大で教えていることもあって、理論整然、スライドも美しく、自分の建築に対する理念を明確に伝えてくださいました。自分の作品空間だけではなく、リサーチやコンセプトのビジュアルが多く、仕事を実現させるためのプレゼンテーションテクニックは迫力を感じました。

17年前の隈さんは大変前衛的で建築の既成概念を超越するような勢いを感じました。今は巨匠となり若手建築家ではなくなりましたが、その発想は変わらず衰えを感じません。

終了後に帰る隈さんを追いかけた学生たちは当時の自分の姿を見るようで微笑ましかったです。



佐藤可士和さん



隈研吾さん

シンポジウム

『ファシズムと文学—下位春吉をめぐる』

土肥秀行 (文化政策学部国際文化学科)

ムッソリーニ政権樹立90周年の節目に、政治と文化の関係性を考察する機会として、2012年12月14日、本学384講義室にてシンポジウム『ファシズムと文学—下位春吉をめぐる』が実施された。主催者においては大きく2つの力学がはたらいていた。すなわち、大戦間の日伊両国で活動した下位春吉(1883-1954)の存在を今日の忘却から掘り上げるズームイン、下位をスタディケースとしファシズムを眺めるズームアウトである。おそらく衆議院選挙直前というタイミング、「ファシズム」という語の引力ゆえであろうか、予想を超える数の聴衆を得た。一般を含め50人強、学生の参加もゼミの枠という「半強制」に留まらないものであった。

第一部「下位春吉をめぐる」では3者による報告、休憩を挿んで第二部「ファシズムと文学」では4者のコメントがあった。冒頭土肥が、下位春吉の紹介も兼ねつつ、ナポリ時代(1915-24)における詩人ゲラルド・マローネとの交流を論じた(発表「下位春吉とゲラルド・マローネ—ナポリにおける文学的交歓」)。ここではファシズム運動が生まれる以前のイタリアにおける下位の文人としての側面を掘り下げている。実際に詩作を発表していたかどうか判然としない下位の「虚像」が、ひいてはその存在の多面性、つかみよさのなさにつながる結論であった。日伊文化交流史研究者である大内紀彦氏の発表「ラグーザお玉の発見と日本への帰国—下位家の人々との交流を通じて」では、1930年代の日伊交流の立役者・下位の役割が浮き彫りとなった。遺族が保管していた貴重な資料(当時の写真)を画像によって紹介した。昭和初期の日本で突如有名となったラグーザお玉は、イタリア滞り50余年のあいだに、母語をほぼ忘れるほど、洋画家「エレオノーラ」であろうとしたとの指摘もあった。福岡国際大学の藤岡寛己教授は、「下位春吉にとってのファシズム」という会の核となる問題を扱った。下位の出身地福岡での調査から判明した、秋月の乱(1876年の士族反乱)に参加した父の存在から、下位におけるファシズム「革命」への志向が読み解かれた。またイタリア・ファシズムの紹介者として著名ではあったけれども、皇道派と統制派という日本型ファシズムの主導権争いのなかで埋没した、との分析があった。こうして文学、国際交流、政治状況といった切り口で、下位の多面的な人物像をみまわした第一部であった。

本学文化政策研究科修士課程2年の牧野晶世さんによる修士論文「ファシズム体制下におけるイタリアの映画政策」のプレ発表を挿み、第二部がはじまった。本学の溝口紀子准教授(1920年代以降、世界各地で盛んとなる柔道を用いた日本のプロパガンダ)、孫江教授(頭山満や内田良平といった国家主

義のイデオログ、出口王仁三郎の大本との交流がもつ意味)、高田和文教授(ラグーザお玉の今日までの日伊での名声)からコメントが寄せられた。最後に、鯖江秀樹講師(立命館大学など)が美術史家リオネッロ・ヴェントゥーリを例にとり、「反ファシズム」というカテゴリーの限界を示した。むしろ美術界の内側での問題提起を孕むケースが、政治と文化という二元論によらず、文化そのもののなかの問題を考えるきっかけともなるとの主張である。これはシンポジウムの趣旨にも関わる重要なコメントであった。というのも、「ファシズムと文学」とのテーマは、対立や相互補完性を指してもいるが、切り離し可であって、それぞれが独自の問題系をなすことを示唆していたからであった。

本シンポジウムの開催にあたっては、本学イベント・シンポジウム等開催費の助成を得た。なお当シンポジウム第一部の報告は2013年4月発行の『イタリア圖書』に掲載される予定である。

下位 春吉(しもいはるきち 1883-1954)

福岡県の秋月に生まれ、東京高等師範学校で英語、東京外国語学校で伊語を学ぶ。1915年に渡伊、ナポリの王立東洋学院で日本語講師を務める。詞華集Poesie giapponesi(1917)や、雑誌《La Diana》と《Sakura》を通じ、同時代人による和歌や、伝統的な日本文化の伝播に力を注ぐ。イタリアの名立たる文人のほか、ダヌンツィオやムッソリーニと交流し、1920年代半ば以降は日本においてイタリア・ファシズムの紹介を行う。



報告を行う大内紀彦氏

活動紹介

第4回県民オペラ「夕鶴」「特別講座」を開催

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

第4回県民オペラ「夕鶴」の公演（3月10日／アクトシティ浜松・大ホール）に向けて、「夕鶴」への理解を深め、見どころ・聴きどころを広く市民のみなさんにお伝えするため、3回にわたり特別講座が開催されました。



○第1回 夕鶴の原風景を訪ねて
(2013年1月12日／本学講堂)

第1回の講座では、日本の民話のストーリー展開の形や鶴のイメージ、ベースとなっている「鶴の恩返し」のストーリーに見出せる様々な意味などを本学・二本松康宏准教授（文化政策学部国際文化学科）の講義とストーリーテラー・松本なお子さんの語りによりお届けしました。

オペラ「夕鶴」は、木下順二の戯曲「夕鶴」（1949年初演）の脚本を忠実にオペラに仕立て直したのですが、その戯曲「夕鶴」は新潟県佐渡島の昔話「鶴女房」を題材としています。講座では「なぜ「鶴」なのか?」、「なぜ鶴の女房は機を織るのか?」、「なぜ鶴の女房は去ってしまったのか?」という3つの問いが設定されました。



「なぜ「鶴」なのか?」～わが国では鶴は古くから田鶴（たづ）と呼ばれ、「稻魂」の化身として田を守る存在であったこと、日本各地に飛来する鶴は「異界から訪れる霊鳥」であり、その優雅な姿から美しい女性のイメージが重ねられ、この物語に鶴が登場すると考えられる。

「なぜ機を織るのか?」～「機を織る」ことは神様に供える「神の衣」を織ることで、「織り姫」伝説など古くから神聖な女性の仕事とされており、神の使いである鶴がなす行為としてふさわしいものと考えられる。神聖な行為なればこそ「決して覗いてはいけないもの」なのである。

「なぜ去ってしまったのか?」～機を織る姿を見られたことで鶴は男のもとを去っていくが、もし「覗く」ことがなかったならば、鶴は死ぬまで機を織り続けなければならない。

「去っていく」ことで、鶴が家にやってくる「幸せ」が一つの家に留まることなく、別の家へも伝播していくかもしれない、ということを想像させる。

講座の最後に「鶴の恩返し」と同じ「異類婚姻」の民話、但し「鶴」とは違うハッピーエンドのお話が松本さんによって語られました。

○第2回 日本人の日本人による日本人のためのオペラの誕生
(2013年2月3日／本学講堂)

今回オペラ公演の芸術監督を務められる伊藤京子さんと演出の中村敬一さんがオペラ作品としての「夕鶴」と作曲家・團伊玖磨氏（1924～2001）についてお話しされました。伊藤京子さんは日本を代表するプリマドンナとして、「夕鶴」のヒ



ロイン“つう”を何度も演じられており、オペラの初演（1952年）から今日に至る様々なトピックを語られました。また現代日本を代表する作曲家・團伊玖磨氏の人柄や仕事ぶり、「夕鶴」に込めた思いなどを様々な

エピソードを交えて紹介され、大変興味深い内容となりました。

オペラ「夕鶴」は初演以来、日本のオペラとしては最も多い800回以上も上演され、海外でも成功した作品ですが、3月10日の公演では夕鶴が初演された1950年代に時代設定をする、という演出上のポイントが中村敬一さんから紹介され、公演への興味が一層深まったものと思います。

○第3回 オペラ「夕鶴」のアナリーゼ～音楽劇としての魅力
(2013年2月17日／本学音楽室)

オペラ公演で指揮を務める柴田真郁さんとヒロイン“つう”を演じる光岡暁恵さん（ソプラノ）を招き、オペラ「夕鶴」の見どころ、聴きどころを光岡さんの歌唱（“つう”のアリア）を交えてお送りしました。

柴田さんは「夕鶴」のスコア（総譜）をスクリーンに投影しながら、登場人物が現れる際の「モチーフ」（テーマ）や、西洋音楽の技法を踏まえながらも作品の随所に現れる日本的な旋律の魅力、繰り返しの効果など作品にちりばめられた様々な“仕掛け”についてわかりやすく解説されました。

講座の後半では“与ひょう”役の水船桂太郎さん（テノール）も加わり、日本語で表現するオペラの魅力と難しさが語られました。日本語での表現は「意味」をストレートに伝えることができるものの、独特の「てにをは」をメロディの中で表現することが難しいということです。また柴田さんから、作品中“つう”以外の登場人物

は「方言」で歌っているが、方言も大切な日本語の一部であり、受け継がれてきた言葉の美しさを是非感じてほしいというお話がありました。



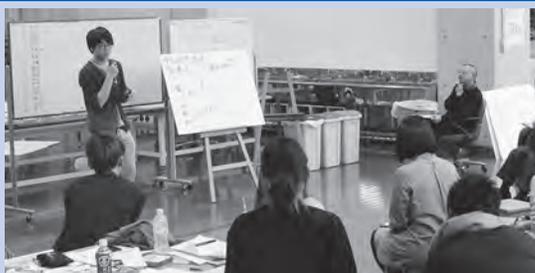
3回にわたり様々な話題が語られ、聴講者のみなさんは公演本番に向けていよいよ興味が高まったことでしょう。語り継がれてきた伝承、戯曲からオペラへの展開、作品や作曲家に関わる話題、日本語の美しさとオペラ表現における難しさ、など「夕鶴」の多彩な魅力が伝えられたものと思われます。

○「ユニバーサルデザイン絵本コンクール2012」展示会 [2013.3.2～3.9 ギャラリー]



応募総数63点の中から選ばれた受賞作品の展示会を開催しました。

○学生デザインワークショップ「サウンドスタジオ2012」 [2013.3.5～3.7 自由創造工房]



「音と暮らす」をテーマにヤマハ様のご協力を頂き、デザインワークショップを開催しました。本学および愛知県立芸術大学、名古屋芸術大学の3大学から学生計16名が参加しました。

○第4会県民オペラ「夕鶴」 [2013.3.10 アクトシティ浜松大ホール]



第5回静岡国際オペラコンクール第1位の
光岡暁恵さんがヒロイン“つう”を見事に演じました。



夕鶴児童合唱団の子どもたちも
素晴らしい歌声を披露しました。

INFORMATION | イ | ン | フ | オ | メ | ー | シ | ョ | ン |

○前期公開講座 文化の接触と変容の現場へ

【会場】 静岡文化芸術大学 【時間】 13:30～15:30

第1回 6/8(土)「インターカルチュラル? -国際文化学 of 構想と射程」

第2回 6/15(土)「広告表現にみる「頭に残るフレーズ」-言語学と国際文化学」

第3回 6/22(土)「マンガとアニメのグローバル化-ポップカルチャーの越境性」

第4回 6/29(土)「フェアトレードは世界を変えるか? -国際文化学の実践性」

第5回 7/6(土)「柔道からJudoへ-女子柔道強化選手の告発を「国際文化学」から読み解く」

馬場 孝 (文化政策学部国際文化学科)

広瀬英史 (文化政策学部国際文化学科)

白石さや (東京大学大学院)

下澤 嶽 (文化政策学部国際文化学科)

溝口紀子 (文化政策学部国際文化学科)

1) 受講料、お申し込み方法等の詳細は後日、大学ホームページ、案内チラシ等でお知らせします。

2) タイトルは変更する場合があります。

編集後記

厳しい寒さが続いたこの冬、二つの日本のオペラ作品に接する機会を得ました。ひとつは本号でもご紹介した「夕鶴」、もうひとつは本学文化・芸術研究センター長・三枝成彰先生作曲のオペラ「KAMIKAZE」の初演です。「KAMIKAZE」は文字通りの片道切符で、敵艦への体当たり作戦を敢行する特別攻撃隊の兵士と恋人、彼等をとりまく様々な人間模様を描いた作品でした。「夕鶴」を含め悲劇のオペラは数あれど、「KAMIKAZE」にみるのはまさに“悲愴”な運命に翻弄される人間の姿。美しいメロディと分厚い音の重なりが悲愴感を一層際立たせ、最初と最後に挿入された合唱曲が平和への深い祈りとあまりにも厳しい現実とをブリッジしています。悲愴な人間ドラマにオペラ作品を通して接する“幸福”をかみしめつつ、芸術の豊かな表現力と平和な日々への感謝に改めて思いを致しました。(St.)

Art & Culture

文化・芸術研究センター
ニュースレター

Vol.17

March, 2013

発行人：三枝成彰 編集人：富田晋司
発行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 企画室)

